

●論文

サルトルという問題

石崎晴己

目次

1. サルトルは実存主義者か
2. 実存は本質に先行する
3. ハイデガー、現存在、Existenz
4. 『嘔吐』の existence
5. Existenz か existentia か
6. ハイデガーによる否認
7. 誤読による無意味な命題なのか?
8. あらゆるものにおける実存の優位?

キーワード

ジャン=ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980)

実存主義・現実存在主義 (Existentialisme)

存在・現実存在・実存 (Existence)

実存 (Existenz)

現実存在 (Existentia)

本質存在 (Essentia)

現存在 (Dasein)

実存は本質に先行する (L'Existence précède l'essence)

現存在の「本質」はそれの実存にある (Das «Wesen»
des Daseins liegt in seiner Existenz)

今日は「サルトルという問題」というタイトルでお話しをしようと思います
が、「サルトルという問題」とはどう言う意味か。

一つは、私にとって「問題」だという意味です。学生時代以来、サルトルを
「やる」中で、サルトルとは何かということを、ずっと考え続けてきました。

私が翻訳を出したアンナ・ボスケッティ、ピエール・ブルデュー、アニー・
コーエン＝ソラル、ベルナール＝アンリ・レヴィなどから、フランスの教育制
度が産み出した最高の成果、まさに学校秀才の極致、20世紀を体現する者、
「全体的知識人」「体制転覆的遺産相続者」というような答えが出されていま
す。近現代（デカルトに始まる、もしくはフランス大革命に始まる）を、その
終盤において集中的に体現した者、であることは間違いない、と考えますが、
どのように体現したのか、まだ答えは完全に出ているわけではなく、私にとっ
ていささか問題のまま留まっています。

もう一つは、これと重複しますが、「現代を生きるわれわれにとって問題で
ある」という意味です。なぜサルトルが出現したのか、20世紀の半ばに、フ
ランスだけでなく世界中を巻き込むように。それは、近現代、20世紀、とい
う時代にとって、解明すべき問題なのではないか。大袈裟に聞こえるかもしれ
ませんが、例えば、20世紀になぜロシア革命が起こり、その結果成立したソ
連がなぜ崩壊するという事態が起こったのか、それは何だったのか、もっと身
近な例を挙げるなら、例えばなぜ秋葉原大量殺人事件が起こったのか、それは
何だったのか、ということが今日のわれわれにとって問題である、という意味
で「問題だ」ということです。

サルトルは実存主義者か

そこで、サルトルとは何者なのか、という問いに答えるため、本日は、最も基本的・初歩的な問題、つまり「実存」ないし「実存主義」についての検討、と言うよりは「再検討」を行いたいと思います。つまり果して「サルトルは実存主義者」なのか、という問題です。

そこでまずサルトル自身がどのように答えているか、次の問答を見て下さい。

問い — いまでも実存主義というレッテルを受入れるわけですね？

サルトル — この言葉そのものは馬鹿げている。それにこの言葉を選んだのは、ご承知の通り、わたしではない。人がわたしにはりつけて、私はこれを受入れただけだ。……しかし、もう誰もわたしのことを「実存主義者」とは呼ばないな。教科書を除いては。……

問い — どっちみちレッテルだとするなら、「実存主義者」というレッテルと「マルクス主義者」というレッテルと、どちらを好まれますか？

サルトル — どうしてもレッテルが必要だというのなら、実存主義者の方を好むだろうね¹⁾。(下線は論者による)

これは、サルトル研究の第一人者のミッシェル・コンタが1975年6月21日のサルトル70歳の誕生日の直前に行ったインタビューで、『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌の同年6月23、30、7月7日号に掲載され、のちに「70歳の自画像」の題で『シチュアシオン X』に掲載されている、サルトルの

1) 「70歳の自画像」『シチュアシオン X』p.179.

— Donc, vous acceptez encore l'étiquette d'existentialiste ?

— Le mot est idiot. Ce n'est d'ailleurs pas moi, comme vous savez, qui l'ai choisi : on me l'a collé et je l'ai accepté... Mais personne ne m'appelle plus «existentialiste», sauf dans les manuels,

...

— Etiquette pour étiquette, vous préférez celle d'«existentialiste» ou celle de «marxiste» ?

— S'il fallait absolument une étiquette, j'aimerais mieux existentialiste.

Situations, X, Gallimard, p.192.

全生涯を総括する体の有名なインタビューですが、サルトルは「実存主義者」というタイトルは、自分から要求した、名乗ったものではないことを明らかにしています。

ではどのような事情で、これを「受入れる」ことになったのか。もともとサルトルのデビュー作『嘔吐』の中心テーマは *existence* であり、この語は通常「実存」と訳される語です。しかし実は『嘔吐』におけるこの *existence* という語を「実存」と訳すべきかどうかは問題がありまして、この点についてはのちに詳しく見て行きます。ともかくサルトルはそれまで *existence* を強調していた。これに加えて、ドイツ占領下で執筆した『存在と無』は、ご承知の通り、ハイデガーの用いる概念を大幅にヒントとして利用しているところから、サルトルは「実存主義者」であるハイデガーの「弟子」であるという考えが、多くはネガティブな調子で流布するようになっていました。

その辺の様子は、次の引用からもよく窺えます。

1945 年の 9 月 1 日から 12 月 31 日まで、新聞にサルトルや実存主義への言及、指摘、ないし参照が載らなかった日は一日もなかった。「実存主義ですって？ どんなものか知りませんね。私の哲学は実存の哲学です……」。二ヶ月ほど前にセール出版社がブリッセルで催した討論会で、彼はそう語っていた。しかし、1945 年の 10 月にはこの言葉を作り出して自分のものとしてしまった新聞と大衆に圧倒され、その力のほどを思い知らされた流行現象に呑み込まれるかのように、サルトルもこの言葉を利用するようになったのである²⁾。(下線は論者による)

2) Du 1er septembre au 31 décembre de l'année 1945, il ne se passa pas une journée qui ne vit dans la presse l'évocation, le rappel ou la référence à Sartre et à l'existentialisme. «L'existentialisme ? Je ne sais pas ce que c'est. Ma philosophie est une philosophie de l'existence … » avait-il déclaré deux mois auparavant au cours d'un colloque organisé à Bruxelles par les éditions du Cerf. En octobre 1945, débordé par la presse et le public qui s'étaient construit, puis approprié le terme, Sartre l'utilisa à son tour, comme submergé par le phénomène de mode qu'il mesurait fort bien. Annie Cohen-Solal, *Sartre 1905 - 1980*, Gallimard, 1985. p.332.

これはサルトルの死後5年目に出された、アニー・コーエン＝ソラルの『サルトル 1905—1980』という、サルトルの伝記の中で最も定評のあるものと言って差し支えない本からの引用です。この本の和訳はまだ出ていませんが、近く拙訳で出る予定になっております。これは言わば第二次資料ということになりますが、尊重するに足るものだと思います。

これだけ見ると、いかにもサルトルは「流行」に押し流されたようになってしましますが、実はこのレットルは、主に共産党周辺から、ナチスに加担したハイデガーの弟子としてサルトルを攻撃する材料として使われたもので、サルトルはむしろ、攻撃を受けて立つ形で「実存主義」を「引き受けた」、ということだろうと思います。「実存主義」をいくら否認しても、攻撃は収まらない。逃げれば、さらに嵩にかかって攻めて来るだろう。それならいっそ「実存主義」を堂々と認め、それが敵が喧伝するようなものではないことを、堂々と訴えた方がましだろう。敵の最大の武器「レットル」を無力化することで攻撃に対抗しよう、ということで、「そうだよ、どこが悪いのだ」という一種の居直りとも言えます。

そこで例の有名なクラブ・マントナンでの講演会「実存主義はヒューマニズムである」(1945年10月29日)になるわけです。実存主義のマニフェストとしては、この講演に先立って、前年に「実存主義とは何か — 批判に答える」というテキストを発表しています(『アクション』17号)。これは拙訳で、人文書院『実存主義とは何か』増補新装版に収録されていますが、これについてはここでは触れません。

講演会は、哲学上の問題を扱うものとしては異例の群衆が詰めかけ、「前例のない文化的大ヒット」(コーエン＝ソラル)となり、さらにボリス・ヴィアンの『うたかたの日々』で戯画的に誇張されて描かれたことなどで、伝説的事件となりました。特別機でパラシュート降下する者がいるかと思えば、下水道伝いに入ろうとする者もあり、「ジャン＝ソール・パルトル(この小説中で、ジャン＝ポール・サルトルらしき人物はこう名付けられている)は斧で道を切り開いて」演壇に進んだ、という具合です。

この講演が翌年、本になります。しかし、後年サルトルは、大衆向けの簡略化された講演であるから、必ずしも自分の思想を厳密に表現していないとして、この本の内容をかなり否認しています。講演の記録の仕方についても、多少の問題がありました³⁾。

しかし、この本は、サルトルの「普及」には決定的に貢献しています。これほどコンパクトな「入門書」を持つ哲学者は稀ではないでしょうか。しかも、他人が書いた「入門書」ではなく、少なくとも自分の講演の記録です。正確に思想を伝えていない部分をいくつか含むにしても、それは厳密さに欠ける、やや簡略化されているという程度の瑕疵であって、決定的に異なるわけではありません。多くの場合、サルトルの思想に共鳴した公衆は、この本を読んで共鳴したのであって、この本が出て以降、この本より前に例えば最初に『存在と無』を読んでサルトルに共鳴したという人は、おそらく極めて少ないのではないのでしょうか。大学や高校でサルトルについて勉強しようとすれば、やはりこれを読むということになります。つまり、この「入門書」を持ったということは、サルトルの幸運の一つなのだと思います。

実存は本質に先行する

さて、この講演＝本の内容はいかなるものか、その基本的な骨子を、「実存」という基本概念に絞って整理してみると、以下になるでしょう。他にも括弧内に示したように、重要な観念が沢山出てきますが、それらはこの際、措いておきましょう。

- 1) 実存は本質に先行する。
- 2) 人間の本質・本性はない（それを決める神が存在しないから）。人間は何ものでもない。

3) 例えば、Michel Contat, Michel Rybalka, *les Ecrits de Sartre*, Gallimard, 1970, p.131-132. を参照。そこには以下の文が見られる。C'est d'ailleurs le seul volume que Sartre ait en grande partie renié. P.132.「ちなみにこれは、サルトルが大部分を否認した唯一の本である」。

- 3) 人間は、いかなる先験的な価値基準もなしに、自由に、(自分一人で) 決定し、行為しつつ (作りつつ)、己を作って行く。faire, se faire (投企、選択、不安、孤独、絶望、責任、全人類、状況、アンガジュマン、etc.)

この有名な「実存は本質に先行する」という命題の件を引用しましょう。

神が存在しないなら、少なくとも一つ、実存が本質に先行する存在が、何らかの概念によって定義され得るより前に実存する存在がある。そしてその存在とは人間、つまり、ハイデガーの言うところの、人間現実である⁴⁾。

この引用は、註で示した訳本での訳文とは大分異なります。基本的には、本稿でサルトルからの引用は、その訳本を尊重しつつ、適宜修正しておりますので、ご了承下さい。この引用の冒頭は、訳本では「たとえ神が存在しなくても」となっていますが、原文は *si Dieu n'existe pas ...* ですから、単に「神が存在しないなら」とすべきです。「人間現実」は、*la réalité humaine* で、これはハイデガーの *Dasein* を、その仏訳者 *Henri Corbin* がこのように訳し、サルトルがそれをそのまま踏襲したもの、と言われています⁵⁾。なお和訳『存在と無』では、これを「人間存在」と訳していますが、和訳『戦中日記——奇妙な戦争』辺りから「人間現実」と訳すことが行われており、ここではそれを踏襲しました。私としては、「人間実在」くらいでも良いのではないかとも思っています。

ここで「実存」と訳されているのは、もちろん *existence* ですが、*existence* と

4) 『実存主義とは何か』(増補新装版) 41 頁。 *si Dieu n'existe pas, il y a au moins un être chez qui l'existence précède l'essence, un être qui existe avant de pouvoir être défini par aucun concept, et que cet être c'est l'homme ou, comme dit Heidegger, la réalité humaine. L'Existentialisme est un humanisme, Nagel, 1954, p.21.*

5) 『存在と時間』の仏訳最終版では、*Dasein* とそのままドイツ語が使われている。

は、そもそも中世のスコラ哲学では、存在するものが「何であるか」を意味する *essentia*（本質）に対して、それが「現実中存在する」ということを意味する語 *existentia*（現実存在）として用いられていたものです。しかしキルケゴールが、*existence*（Existenz）という語に、人間の還元不可能な、個人的・独自の存在という新たなニュアンスを与え、ハイデガーがこれを継承・発展させたのを承けて、九鬼周造が「現実存在」を簡略化して「実存」という訳語を創始したとされています。九鬼周造の「実存哲学」（『岩波講座 哲学』1933）以来のこのようです。

ハイデガー、現存在、Existenz

そこでこの点についてハイデガーはどう言っているかを見ると、まず『存在と時間』「序論第一章第二節」で、「われわれ自身が各自それぞれであり、そして問うということを自己の可能性のひとつとしてそなえているこの存在者を、われわれは述語的に、現存在（Dasein）という名称で表すことにする⁶⁾」と述べて、「現存在」という用語を提起した上で、同第四節で、以下のように述べています。

現存在がいつもなんらかのありさまで関わり合っている存在そのものを、われわれは、実存（Existenz）となづけることにする。……むしろ現存在の本質は、そのつどその存在をおのれの存在として存在しなくてはならないということにあるのであるから、……⁷⁾。

つまり、われわれ人間という存在者たる Dasein が存在する、その存在その

6) マルチン・ハイデッガー『存在と時間 上』ちくま学芸文庫、細野貞雄訳、38-39 頁。
Dieses Seiende, das wir selbst je sind und das unter anderem die Seinsmöglichkeit des Fragens hat, fassen wir terminologisch als *Dasein*. Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 2009, p.7.

7) 同上、48 頁。Das Sein selbst, zu dem das Dasein sich ... immer irgendwie verhält, nennen wir Existenz. Und weil ... sein Wesen (das Wesen des Daseins) vielmehr darin liegt, daß es je sein Sein als seiniges zu sein hat, ... *Ibid.*, p.12.

ものを Existenz (実存) と呼ぶわけですが、また、この用語をスコラ学以来の *existentia* と区別して、第一部第一編第一章第九節で、次のように正確化しています。

われわれはこの存在者〔現存在〕の存在をあらわすために Existenz という名称を選ぶにしても、この名称は存在論的には *existentia* という伝統的用語と同じ意味ではなく、またそういう意味をもちえない、……。Existentia とは、存在論的には、客体的存在 (*Vorhandensein*) というほどの意味であって、このような存在様相は、現存在という性格をそなえた存在者には、本質上あてはまらない。……われわれは *existentia* という名称のかわりに、それを解釈していつでも客体的存在という表現を用い……⁸⁾。

要するに、フランス語の *existence* に対応するハイデガーの用語としては、Dasein の存在を意味する Existenz と、伝統的な *existentia* の意味を継承すべきものとしての「客体的存在」がある、ということになります。

『嘔吐』の *existence*

では、サルトルではどうなのか。まずサルトルの出世作『嘔吐』に登場する *existence* は、どう考えても、ハイデガー流の Existenz ではなく、どちらかと言えば、伝統的な *existentia* の意味のもの、ハイデガーなら「客体的存在」と言ったであろうものです。例の有名なマロニエの樹の場面から、いくつか抜粋してみましよう。

8) 同上、108-109頁。Dabei ist es gerade die ontologische Aufgabe zu zeigen, daß, wenn wir für das Sein dieses Seienden die Bezeichnung Existenz wählen, dieser Titel nicht die ontologische Bedeutung des überlieferten Terminus *existentia* hat und haben kann ; *existentia* besagt nach der Überlieferung ontologisch soviel wie *Vorhandensein*, eine Seinsart, die dem Seienden vom Charakter des Daseins wesensmäßig nicht zukommt.... dass wir für den Titel *existentia* immer den interpretierenden Ausdruck *Vorhandenheit* gebrauchen,... Ibid., p.42.

……普段、存在は**隠れている**。しかし存在はそこ、私たちの周りに、私たちのうちにある。存在は私たちである。

……存在はとつぜんヴェールを脱いだ。……それは物の生地そのもので、この（マロニエの）根は存在で捏ねられて作られたのだ。……**物の多様性、物の個別性は、仮象にすぎず、表面を覆うニスにすぎない**。そのニスが溶けてしまったのだ。あとには怪物じみた、ぶよぶよした、混乱した塊が残った——むき出しの塊、おそろべき、また猥雑なまでにむき出しの塊が。

……マロニエは余計だった。……この私もまた余計だった。……私はぼんやりと、自分を抹殺することを夢見ていた。……しかし私の死さえも余計だったろう。……私の屍体も、小石の上に流れる私の血も余計。腐乱した肉体も、それを受け取る大地のなかで**余計なもの**だったろう。……私は永遠に余計なものなのだった。

……本質的なことは**偶然性**なのだ。つまり定義すれば、存在は必然ではない。……存在物は出現し、出合いに身を委ねるが、人はこれを絶対に演繹できない。

このどろどろした形の定まらないもの（＝世界）が存在することに、**何の理由もありはしないのであった**⁹⁾。

9) 『嘔吐』新訳版、鈴木道彦訳、212-223頁。なお引用中、太文字は論者による。… ; à l'ordinaire l'existence se cache. Elle est là, autour de nous, en nous, elle est nous, ...

… : l'existence s'était soudain dévoilée ... C'était la pâte même des choses, cette racine était pétrie dans l'existence ... ; la diversité des choses, leur individualité n'était qu'une apparence, un vernis. Ce vernis avait fondu, il restait des masses monstrueuses et molles, en désordre — nues, d'une effrayante et obscène nudité.

... De *trop*, le marronnier, ... Et moi ... moi aussi j'étais de *trop* ... Je rêvais vaguement de me supprimer, ... Mais ma mort même eût été de *trop*. De *trop*, mon cadavre, mon sang sur ce cailloux ... la chair rongée eût été de *trop* dans la terre qui l'eût reçu ... : j'étais de *trop* pour l'éternité.

... L'essentiel c'est la contingence... Par définition, l'existence n'est pas la nécessité... ; les existants apparaissent, se laissent *rencontrer*, mais on ne peut jamais les *déduire*...

... il n'y avait aucune raison pour qu'elle existât, cette larve coulante. *La Nausée*, Gallimard, 1968, p.176 - 186.

ここで「存在」と訳されているのが、*existence* です。『嘔吐』の和訳は、白井浩司先生による戦時中から始まる翻訳作業の結果、1947年に単行本として完成しますが、この時以来この語は「存在」と訳されています。ご覧のように、ここでの *existence* は、いわゆる人間の固有の存在のあり方という意味での「実存」ではありません。人間も含めて、世界の森羅万象、あらゆるもの[事物、事象]の「存在」であって、ハイデガーのヒントを踏まえれば、伝統的な *existentia*、彼の用語では「客体的存在」(*Vorhandensein*)に当たります。もう少し敷衍するなら、ものの多様性、個別性、すなわちそれらが普段見せている様相は、表明に塗られたニスにすぎず、いまやそのニスが剥がれて、その下にある真の姿が露呈する、というわけですから、この *existence* とは、人間の通常の感覚・知覚・認識能力では感知できない、もの(=存在物)の真の姿です。これはまさに、カント的な発想における「もの自体」(*Ding an sich*, *Chose en soi*)であり、ヌーメノン(フランス語では, *noumène*)と彼が呼ぶものです。もっともカントにおいては、このものの真の姿(ヌーメノン)は、人間の知覚・認識能力では知覚できないため、神の英知のみによって把握しうるもの、ということになって、人間の能力を越える高度なものとされているようです。逆にサルトルは、それを感覚的には醜く、不愉快な、下劣な様相を呈するもの(「混乱した」「ぶよぶよした」「どろどろした形の定まらないもの」)、つまり人間の知覚能力にとってより下にあるものとして提示しようとしています。通常なら姿を現さない、下に隠れていたものが姿を現した時のその姿を描く、というのは、イメージ・表象の問題ですので、ここではこれ以上踏み込まないでおきましょう。

もう一つ、「真の姿」すなわちイメージとは別に、「偶然性」という「概念的」な定義も登場しています。「存在すること(*exister*)」には、何の理由もない。つまりすべて(=世界)は、いかなる必然=必要性もなく、余計・余分なもの(つまり無くても構わないもの)」ということです。これはハイデガー的な「存在する(ある)とはどういうことか」という問題系とのある程度の通底を窺わせないでもありませんが、ここで問題になっているのが、*être* (=

Sein)ではなく、existenceであることを初めとして、一先ずは別のものと捉えておくべきでしょう。

さてここで、次の文を見て下さい。これは『存在と無』の訳者である松浪信三郎先生が著された岩波新書『実存主義』の一節で、まさにマロニエの樹の場面を論じている文章ですが、ここで先生は、「存在」と「実存」の対比を分かりやすく説明しようとされています。

公園の柵は存在する。芝生は存在する。噴水のせせらぎは存在する。ベンチに腰掛けている赤毛の男は存在する。……だが、私はいったい存在するだろうか？……他人の見る風景のなかの一点在としては、やはり存在するであろう。しかし、少なくとも、かく問うている私は、存在するのではなくて、実存するのである。人間は存在するのではない。人間は実存する¹⁰⁾。

いうまでもなく、ここで「存在」と「実存」として区別されているものは、フランス語ではともに existence, exister です。つまりこの日本語は、フランス語に訳したら、全くチンプンカンプンになってしまいます。そこで、高橋允昭先生のように「この著者は、原書で La Nausée を読まなかった」と推測する人も出て来るのですが¹¹⁾、私としては、松浪先生は、ともに existence, existerであることを承知しながら、白井訳を尊重しつつ、existenceの含む二つの含意を日本語の中で区別しようとした、ということではないかと考えます。

この語を、上述のように白井浩司先生は「存在」と訳しましたが、1994年に出した改訳新装版では、「実存」と訳し直しました。戦後の実存主義以降のサルトルの用語法に合わせるためと思われますが、しかし、事物の「実存」という日本語はさすがに違和感を引き起こしますので、2010年に新訳を出した

10) 松浪信三郎『実存主義』岩波新書、1962年、127-128頁。

11) 高橋允昭「存在するものは現実存在しない」、『いま、サルトル』現代詩手帖特集版、思潮社、1991年、046頁。

鈴木道彦先生は、「存在」と訳しています。

私としては、この語が哲学的含意で用いられている個所では、特に être (存在) と区別するために、本来なら「現実存在」という訳語が適当と考えており、以前に『戦中日記——奇妙な戦争』を訳した時には、共訳者の海老坂武氏にご無理をお願いして、この訳語で通させて貰いました¹²⁾。

Existenz か existentia か

『嘔吐』的意味での existence は、ハイデガー的 Existenz ではなく、existentia (客体的存在) で、これは人間も含めてあらゆる事象・事物に適用できますが、「現実存在する理由も、根拠も、必然(必要)性もなく、偶然的な単なる事実としてそこにある」ということが最も衝撃的なのは、それが人間について言われる場合です。そして『嘔吐』レベルでのサルトルのメッセージの衝撃は、人間も「あらゆる事物と同様に(同じ資格で)」単に「現実存在する」にすぎないのに、人間はさまざまな虚構や自己欺瞞の網を張り巡らしてその事実を見まいとしている、ということにあります。

このメッセージは、当時のサルトル、つまり第二次世界大戦中に動員され、次いでドイツの捕虜収容所に入れられるまでの、第一期(『嘔吐』段階と呼ぶこともできます)のサルトルにとって、中心的メッセージで、例えば、小説集『壁』の書評掲載依頼状(Prière d'insérer)では、5つの中編小説の登場人物たちが、「現実存在」を直視せず、それから眼を背け、逃れようとする者たち、として紹介されています。書評依頼状とは、新刊書が上梓された時、書評に取り上げてもらうために、新聞各社に見本とともに送る要約的な説明文です。

だれも<現実存在>を真っ向から見つめようとはしない。ここにあるのは、<現実存在>を前にした五つの敗走、五つの人生である。パブロは……エヴ(部屋)は、現実ならざる狂気の閉ざされた世界に住まうピエー

12) 特に『戦中日記 — 奇妙な戦争』海老坂武、石崎晴己、西永良成訳、211頁。

ルの側にいてやろうとするが、そうは行かない。この世は偽りの見せかけにすぎず、狂人とは嘘っぱちを口にする者たちなのだ。エロストラートは……。ローラ [リュリュ] (水いらず) は……。リュシヤン・フルーリエは、自分が現実存在することを感じる状態に最も近づいている。しかし彼はそれを感じようとはしない。彼は逃避し、自分の権利に見惚れる行為の中に逃げ込んでしまう。権利とは現実存在しないものであり、存在する(être) はずのものだからである。しかしそうは行かない。これらすべての逃亡は、壁に突き当る。＜現実存在＞を逃れるのも、やはり現実存在することにほかならないのだ。＜現実存在＞とは、人間が離れることのできない一つの充満なのである¹³⁾。

ここでパブロとかエヴとかいうのは、それぞれ中編小説の主人公の名で、ご覧のようにそれぞれの主人公が何をするのかを紹介することから、この書評依頼状は出来上がっています。ここでは例として、「部屋」の主人公エヴと、最も長く最も重要な「ある指導者の幼年時代」の主人公リュシヤン・フルーリエについての記述だけをお示ししました。

この書評依頼状は、「現実存在」という、いかにも難解そうな概念を強調して、読者の好奇心をそそろうとする魂胆が透けて見えますが、サルトルの「現実存在」の具体的・日常人生的な意味合いがよく窥えます。つまり『嘔吐』にあった、哲学的・認識論的ニュアンスを削ぎ落とされた「現実存在」とは、人間の生活の現実の、あらゆる虚飾を剥ぎ取った真の姿です。「権利」は「存在するはずのもの」というのは、分かりにくいでしょうが、要するに、「現実存在する」物質的な存在物ではなく、人間の精神が作り出した抽象的制作物（「存

13) Personne ne veut regarder en face l'Existence. Voici cinq petites déroutées... devant elle, cinq vies. Pablo, ... Eve essaie de rejoindre Pierre dans le monde irréel et clos de la folie. En vain : ce monde n'est qu'un faux semblant et les fous sont des menteurs. Erostrate... Lola [Lulu] ... Lucien Fleurier est le plus près de sentir qu'il existe mais il ne le veut pas, il s'évade, il se réfugie dans la contemplation de ses droits : car les droits n'existent pas, ils doivent être. En vain. Toutes ces fuites sont arrêtées par un Mur ; fuir l'Existence, c'est encore exister. L'Existence est un plein que l'homme ne peut quitter. Sartre, *Œuvres romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade, p.1807.

在する」もの)である、という意味です。例の『嘔吐』の「マロニエ」でも、円のような幾何学的図形や音楽の楽曲は、定義や演繹で説明し尽くされ、厳密で純粋な線で輪郭を保ち、内的必然としての己自身の死を己のうちに含んでいるものとして、「現実存在」とは別の世界に属するものとされていました。

さて一先ず『嘔吐』段階の *existence* は、「実存」と訳すには不適当な「現実存在」である、ということは了解されたとして、実はサルトルにおいてどこからが「実存」なのか、というのは必ずしも明確ではありません。日本語ですと、「存在」と「実存」で明瞭に語が異なりますが、サルトル自身を含めてフランス人たちは、どうも *existence* という語の単一性に護られて、あまりこの差を気にしない気配があります。

ハイデガーによる否認

これまで『実存主義はヒューマニズムである』以前のサルトルにおける *existence* の用法を一通り検討したわけですから、いまや『実存主義はヒューマニズムである』の主要命題である「実存は本質に先行する」の検討に移りましょう。実はこの「実存」にも、かなり曖昧さが付きまとっています。

ハイデガーは、サルトルの実存主義ヒューマニズムを批判して『ヒューマニズムについて』というテキストを書いています。これはそもそも、フランス人のハイデガー研究家ジャン・ボーフレの質問に答える書簡であったのですが、この中でハイデガーは以下のように述べています。

サルトルは、エクシステンティアとエッセンティアとを、形而上学の意味において受け取っている。この形而上学は、プラトン以来、こう言っている。エッセンティアはエクシステンティアに先行する、と。サルトルはこの命題を逆転させたわけである。しかし、一つの形而上学的命題を逆転させても、その逆転は、やはり一つの形而上学的命題にとどまっている。

.....

エクシステンティアがエッセンティアより優位すると説くサルトルの主要命題は、右の事情とは別にともかく、その哲学を表すのにふさわしい題目として「エクシステンツィアリズムス」という名称が正当であることを示している。けれども「実存主義」の主要命題は、『存在と時間』のうちに登場する先に掲げた命題とは、寸毫も共通するものをもたない¹⁴⁾。

つまり、「実存は本質に先行する」というのは、「本質は実存に先行する」というプラトン以来の形而上学の命題の単なる逆転であり、それ故にこれも一つの形而上学的命題にすぎない。とはいえ *existentia* の優位を主張するのであるから、サルトルの哲学は *existentialismus* [実存主義] という名称を冠する資格はある。しかしその主要命題「実存は本質に先行する」は、自分 [ハイデガー] が『存在と時間』で提示した命題とは、全く関係のないものである——というのです。

ご承知のように、ハイデガーの問題設定は、「ある」ということ、すなわち「存在」とはいかなることか、その意味の探究です。ハイデガーによれば、そのような存在論こそが、古代ギリシア以来の哲学の目的であったにもかかわらず、プラトン以来の形而上学は、存在を忘却した、ということになります。そのような形而上学を解体しつつ、存在への問いかけを行う手掛かりとして、存在というものと特別の関わりを持つ存在者である人間という存在者の存在（実存）の分析を行う、というのが、『存在と時間』の、少なくとも現に刊行された部分（この本は、未完成で、その構想を十全に実現しておりません）の趣旨に他なりません。その際、「人間」という用語は、あまりにも多様な定義や日

14) 『「ヒューマニズム」について』ちくま学芸文庫、渡邊二郎訳、50－52頁。

Er [Sartre] nimmt dabei *existentia* und *essentia* im Sinne der Metaphysik, die seit Plato sagt: die *essentia* geht der *existentia* voraus. Sartre kehrt diesen Satz um. Aber die Umkehrung eines metaphysischen Satzes bleibt ein metaphysischer Satz. ...Der Hauptsatz von Sartre über den Vorrang des *existentia* vor der *essentia* rechtfertigt indessen den Namen « Existentialismus » als einen dieser Philosophie gemäßen Titel. Aber der Hauptsatz des « Existentialismus » hat mit jenem Satz in « Sein und Zeit » nicht das geringste gemeinsam; ... Martin Heidegger, *Über den Humanismus*, Vittorio Klostermann Frankfurt am Main, 1949, p.17－18.

常語的含意という夾雑物がまわりついた曖昧な語ですので、存在への問い掛けの手段としての側面だけに限定した「現存在」(そこに存在する)という用語を採用したわけです。

このハイデガーの命題とは、「現存在の「本質」はそれの実存にある」というものですが、これは実は、『存在と時間』第9節の先に引用した件に続く件に出てきます。念のため、この部分を引用してみましょう。

現存在の「本質」はそれの実存にある。したがって、この存在者について取り出すことのできる諸性格は、しかじかの「形相」をおびて客体的に存在するものの客体的「属性」というようなものではなくて、そのつど現存在に可能な存在の仕方であり、かつそれのみである。……それゆえ、……「現存在」という名称は、机や家や樹木のように、それが何であるかを表現せずに、存在を表現しているのである¹⁵⁾。

「現存在」、要するに「人間」という存在者は、机や家や樹木のように「それが何であるか」(=属性・本質)によって尽くされるのではなく、己の存在(=実存)において存在そのものと関わって存在するものであり、したがって「実存」こそがその「本質」をなすわけです。

いずれにせよ、ハイデガーがサルトルの命題を否認していることは、間違いありません。ところでサルトルは、その命題をどこからどのようにして引き出したのでしょうか。あらためて例の命題を見てみると、「少なくともハイデガーの言うところの人間現実(=Dasein)において、実存が本質に先行する」というのですから、やはりハイデガーの上の命題を援用しようとしていることは、確かでしょう。

15) 『存在と時間』前掲書、109頁。Das «Wesen» des Daseins liegt in seiner Existenz. Die an diesem Seienden herausstellbaren Charaktere sind daher nicht vorhandene »Eigenschaften« eines so und so »aussiehenden« vorhandenen Seienden, sondern je ihm mögliche Weisen zu sein und nur das ... Daher drückt der Titel »Dasein«, ... nicht sein Was aus, wie Tisch, Haus, Baum, sondern das Sein. *Sein und Zeit*, Op. cit., p.42.

では『実存主義はヒューマニズムである』以前に、サルトルがハイデガーのこの命題に触れている件はないかというのと、『存在と無』の第4部第1章のI「行動の第一条件は自由である」に次のような件があります。

ハイデガーが「ダーザイン」一般について述べたことは、自由について述べるべきことだ。すなわち「自由において、実存は本質に先行し、それを指揮・支配する」と¹⁶⁾。

ここで「ハイデガーがダーザインについて述べたこと」というのは、上記の「現存在の「本質」はそれの実存にある」という命題であると考えられます。サルトルはこれを「現存在において実存は本質に先行する」と書き換えた（つまり、そのように解釈して、自分流に敷衍した）上で、「現存在」を「自由」に入れ替えるべきだ、と主張しているわけです。「自由云々」の件はしばらく措くとして、「現存在の「本質」はそれの実存にある」というのと、「現存在においては、実存は本質に先行する」というのとでは、一見したところ文言は異なりますが、上述したように、「現存在においては、実存がその本質をなす」という「理解」を経て、さらに「実存が本質に先行する」という文言に言い換えたのだ、ということはそれなりに想定できるでしょう。

つまり、『実存主義はヒューマニズムである』の「人間現実（＝現存在）において、実存は本質に先行する」という命題のソースが、ハイデガーのこの命題である、ということです。その上で、サルトルが「現存在」を「自由」に置き換えるべきだと主張している点について、多少の説明を試みますと、サルトルにとっては、「人間＝自由」という等式が成立します。例えば、『実存主義はヒューマニズムである』の中には、「人間は自由である。人間は自由そのものである¹⁷⁾」という有名な文が見えます。「人間は自由である」というのは、フラ

16) 『存在と無 III』松浪信三郎訳、25頁。C'est d'elle [la liberté] qu'il faudrait dire ce que Heidegger dit du *Dasein* en général : « En elle l'existence précède et commande l'essence ». *L'Etre et le néant*, Gallimard, 1948, p.513.

17) 『実存主義とは何か』（増補新装版）、50頁。L'homme est libre, l'homme est liberté.

ンス語では *L'homme est libre.* で、これは、主語+繫辞+属詞としての形容詞、という通常の文ですが、二番目の文は、*l'homme est liberté.* と、属詞が名詞ですから、人間=自由という等式が表現されているわけです。

さらにもう一つ、このソースと考えられる文を『存在と無』から引用しておきましょう。

人間的自由は人間の本質に先立つものであり、本質を可能ならしめるものである。……われわれが自由と呼ぶものは、「人間存在」(人間現実)の存在と区別することができない。人間はまず存在し、しかるのちに自由であるのではない。人間の存在と、人間が「自由である」こととのあいだには、差異がない¹⁸⁾。

ここでは、人間の「存在」そのものが「自由」ないし「自由であること (=存在)」として示されています。サルトルにとっては「現存在=人間」という等式が成立することを前提とするなら、これで「現存在=人間=自由」という等式が成立するわけで、サルトルとしては、その中で「自由」という語が最も適切にして有意的である、と考えた、ということになります。

誤読による無意味な命題なのか？

それにしても、「現存在の「本質」はそれの実存にある」という命題を、「(現存在=人間現実=) 人間において、実存は本質に先行する」と読み替えたことは、明らかな誤読と言わねばなりません。少なくともサルトルは、「現存在を通して存在の意味を探る」というハイデガーの問題設定をほとんど理解せず、それを「伝統的な」本質と実存の区別と対立の問題として理解した、とい

L'Existentialisme est un humanisme, Op. cit., p.36-37.

18) 『存在と無 I』109-110 頁。La liberté humaine précède l'essence de l'homme et la rend possible, ... Ce que nous appelons liberté est donc impossible à distinguer de l'être de la «réalité humaine». L'homme n'est point d'abord pour être libre ensuite, mais il n'y a pas de différence entre l'être de l'homme et son «être-libre». *L'Etre et le néant, Op.cit., p.61.*

うことになるでしょう。しかも、ハイデガーの Existenz と伝統的な existentia の違いにさえ気づかなかった、と。

現にサルトルは、『実存主義はヒューマニズムである』の中で、例の「実存は本質に先立つ」という命題の説明に、ペーパー・ナイフの製造という、いかにもリセの授業を彷彿とさせるような具体例¹⁹⁾を用いています。これは例のプラトンの『国家』X597B-Dに見える、本性（実在）＝アイデアの制作者としての神、という議論をそのまま踏襲したもので、このプラトンの議論が、おそらくスコラ哲学における essentia の議論の出発点をなしていることを考えると、まさにサルトルの問題意識は、プラトン以来の形而上学の中心課題に向けられていることは、明らかです。

要するにサルトルは、ハイデガーの命題を誤解・誤読したのです。ハイデガーを理解せず、その問題設定を共有せずに、ハイデガーの命題とは異なるものを、ハイデガーの命題として提示したことになります。ただこれは差し当たり、悪意ある「歪めた剽窃」ではなく、字面の同一性・類似性を、短絡的に内容の同一性と思い込んでしまった無頓着と言うべきでしょう。

だとすると、どういうことになるのか。サルトルの命題は、全く無意味なものということになるのでしょうか。

実はサルトルが、ハイデガーやフッサールについて、同じような誤解に基づく援用や要約や論評を行っていることは、すでによく知られています。またジュヌヴィエーヴ・イットなどの研究によって、「コラージュと混合、無自覚の引用と剽窃、暗黙の参照と無意識の借用、模作とパロディ」²⁰⁾等が、サルトルの文学作品、特に『嘔吐』の構成要件を成しているということが明らかになっています。これはおそらく哲学作品にもかなり当てはまると考えられま

19) 『実存主義とは何か』前掲書、39-40頁。L'Existentialisme est un humanisme, Op. cit., p.17-18.を参照。

20) アンナ・ボスケッティ『知識人の覇権』拙訳、新評論、1987年、53頁。... de collages et de brassages, citations et plagiats inavoués, références tacites et réminiscences inconscientes, pastiches et parodies. Anna Boschettie, Sartre et les Temps modernes, les Éditions de minuit, 1985, p.38. また、プレイヤード版サルトル『小説集』のジュヌヴィエーヴ・イットの「序文」を参照のこと。

す。

いろいろ問題はあり、詳しく検討する必要もあるでしょうが、こうした誤解や誤った修正の結果産み出された命題や言表は、もしそれなりに妥当性もち、人々に訴えかけるものであるとすれば、そこにサルトルの、或る種の「観念に関する」創造性を見るべきではないか、というのが、一つの有力な見方となっています。

ただ私としては、この「実存は本質に先行する」という命題が、どの程度ハイデガーの「威光」に依存しているか、という問題点があると考えます。それが人々を納得させ、受入れられるに際して、それがハイデガーの命題であるとの前提（結果的にその前提は崩れるわけですが）がとれほど与って力があつたのか、簡単に言うと、ハイデガーの命題であるが故に受入れられ、信じられたという度合がどれほどのものであったか、ということです。

その度合はそれほど大きくはない、というのが差し当たっての私の判断です。公衆は、「ハイデガーも同じことを言っているようだ」とは考えたでしょうが、「ハイデガーが言っているのだから、正しいのだろう」と考えて、賛同したわけではないでしょう。さらにこの命題は、伝統的な命題のドラスティックな逆転・転倒として受け止められ、ハイデガーとは独立に受容され、支持されたのです。

ただサルトル自身が自信を持ってこの命題を提唱することを、ハイデガーへの準拠、ないしその確信が大いに後押しした、ということは考えられます。つまり、サルトル自身は、それがハイデガーの命題だと確信しつつ、ハイデガーのものではない命題を打ち出したが、公衆はハイデガーとは無関係にその命題を受入れた、というわけです。その意味で、サルトルはハイデガーの威光を「利用」した、と言うことは可能でしょう。

あらゆるものにおける実存の優位？

ハイデガーとの関係についてはこのくらいにして、改めてサルトルの命題そのものを考えてみましょう。例えばコーエン＝ソラルは、実存主義の爆発的流

行を記述する中で、クリスチヌ・クロナン『門外漢のための実存主義小教理問答』という本の一節を挙げています。

クリスチヌ・クロナン『門外漢のための実存主義小教理問答』

問い「実存主義とは何か」

答え「実存主義とは、人間はその生涯を通じて、自分の行動によって自らを作り出す、と信じることである」……

問い「いまの実存主義は何を主張しているか」

答え「実存は本質に先立つことを」²¹⁾

これは流行爆発直後の事例ですが、もう一つ、これよりやや「アカデミック」な例も見てみましょう。啓蒙書として最も定評のある『クセジュ』文庫の『実存主義』（ポール・フルキエ著）の改訂増補新版（1961）の序論の一部と目次の要点です。

存在論は、われわれが経験する存在の中に二つの形而上学的原理、本質と実存とを区別する。P.9.

……19世紀までの古典的哲学は、「本質」の優位を疑わないであろう。これを実存主義と対比するためにわれわれは「本質主義的哲学」という従来用いられていない言葉で示すとしよう。これに反して、実存主義者が優位を帰すものは、「実存」である。P.12.

……

序論 本質の概念と実存の概念

21) Christine Crotin, *Petit Catéchisme de l'existentialisme pour les profanes*.

— Demande : Qu'est-ce que l'existentialisme ? — Réponse : L'existentialisme est la croyance que l'homme se crée au cours de sa vie par ses actions... (...)

— Demande : Qu'affirme l'existentialisme actuel ? — Réponse : Que l'existence précède l'essence. Sartre 1905 – 1980, *Op. cit.*, p.346 – 347.

第一部 本質主義の哲学

第一章 神学的本質主義 プラトンの本質主義 アウグスチヌスの本質主義

第二章 概念論的本質主義 アリストテレスの概念論 トマスの概念論 科学主義の概念論

第三章 現象学的本質主義 (フッサール)

第二部 実存主義の哲学

第一章 実存主義一般

第二章 無神論的実存主義 その代表者たち (ハイデッガー サルトル メルロー＝ポンティ) …

第三章 キリスト教的実存主義 キェルケゴール ガブリエル・マルセル カール・ヤスパース

第三部 本質主義的実存主義

第一章 ルイ・ラヴェル

第二章 ジョルジュ・ギュスドルフ

ポール・フルキエ (Paul Foulquié) は、PUF (フランス大学出版) から大部の『哲学用語辞典』を出している哲学教育の重鎮ですが、ご覧のように、サルトルの命題に準拠して実存主義を定義しつつ、それに対比されるものとして「本質主義」という概念を新たに提唱しています。つまり「実存が本質に先行する」とする「実存主義」と「本質が実存に先行する」とする「本質主義」の対立として、哲学史を描き出したのです。

つまり少なくとも、フランスの文化界は、ハイデガーに言わせれば「伝統的な形而上学的」性格をもつ、エッセンティアとエクシステンティアの対比という構図のなかで、サルトル的「実存主義」を受入れたことになります。ただそれは、ハイデガーの Existenz から派生する「実存主義」とは、原理を異にするものであり、私が本来なら「現実存在」と和訳すべきであると主張した existentia の概念を基盤とするものである以上、厳密には「現実存在主義」と

訳すべきものと主張すべきところでしょう。

そしてもしその主張が許されるなら、私としては、サルトルの命題に一つ修正動議を出したいと思います。それは「実存が本質に先行する」のは「人間においてである」という留保を撤廃することです。これまで見てきたように、この留保は、ハイデガーの命題の残滓に他なりません。「現存在の「本質」はそれの実存にある」というハイデガーの命題を、誤解していることに気づかずに、敷衍しようとしていた限りで、「人間において」という留保がでてきたわけですが、ことが単なる *essentia* と *existentia* の関係であるならば、「人間において」に限定される必要はなく、およそあらゆる事象あらゆる存在者について「現実存在は本質に先行する」という命題が成立すべきではないでしょうか。

そのような点を踏まえて、本論考における *existence* 問題の出発点であった例のマロニエの樹の場面を改めて考えてみると、あらゆるものの多様性・個性、現象としての様相が掻き消されてしまうというのは、ものの「何であるか」(＝本質)が無意味化する、ないし二次的・副次的なものとなり、それらが *exister* しているという剥き出しの事実だけが残るということですから、これもやはり「あらゆるものに関して」現実存在が先行するという事例であると言うことができます。

ただこれは必ずしもサルトルが受入れるところであるとは限りません。サルトルの「存在論」では、移動、生成、変化など動的な原理はひたすら人間存在(対自存在)の属性であって、事物は静的・受動的な原理(惰性 [*inertie*])に従うものにすぎないからです。たしかに中期・後期のサルトルにおいて、そのような二分法を克服することが試みられました(例えば『弁証法的理性批判』)が、実質的な総合ないし克服が達成されたようには見えません。

一方で、サルトル自身は、すでに『存在と無』の段階から、ハイデガー的 *Ex-sistenz* (脱自)の概念を大幅に取り入れており、常に己を前方に投げ出す投企によって、不断に己を創造しつつ世界を創造して行く、という人間のあり方のモデルは、まさにそのような脱自概念(もしかしたら、これも誤解に基づく)に立脚しています。*existentia* を「現実存在」と訳すべきだとしても、サ

サルトルの *existence* は、言わば「実存化」の傾向を見せているわけです。サルトルが己の教義として構築して行ったものは、「現実存在主義」と「実存主義」の二つの側面を微妙に組み合わせた *existentialisme* なのですが、その限りでこの語を和訳するなら、やはり便宜的に「実存主義」という語を当てるしかないでしょう。

その中でこの二つの成分がその都度どのような割合で配合されているのかを分析することは、はたして可能なのか、はたして意味があるのか、という点は何とも言えませんが、少なくともそれは本論考の範囲を越えています。同様に、先に想定した「あらゆる存在者において、実存が本質に先行する」という命題が、具体的にはどのようなことを意味するのか、という問題も検討する余裕はもはやありません。私としては、これらの問題を示唆したことに満足して、サルトルにおける *existence* をめぐる考察を閉じさせて戴こうと思います。ご清聴感謝します。

追記 本論考は、2012年2月1日に行われた私の最終講義の記録である。講義自体は、初めに、これまでの研究者としての生涯を振り返る自己紹介があり、最後に、「本質」と「実存」をめぐる具体的事例の考察があったが、その部分は割愛した。本体部分の記録としては、おおむね忠実な再現を目指したが、説明が不十分なし不明瞭と思われる個所には、適切な補足を施した。

当日は、400人収容の教室がおおむね埋まるほどの多数の方が出席して下さり、その後に青学会館で行われた懇親会にも、150人ほどの方がご参加下さった。この機会を借りて、改めてご出席のみなさんに御礼申し上げるとともに、ご支援下さった総合文化政策学会と、石崎ゼミ OB 会に、心から御礼申し上げる次第である。

* なお、サルトルの作品の和訳の出版社は、いずれも人文書院である。